

# 最終章 教師力とは何か

## 第1節 教育課題をマネジメントする

いよいよまとめの章です。この節では、1章から4章で取り上げてこなかったテーマの内、重要度が高いと思われる問題を考えたいと思います。

この節は、

- 生徒指導とは何か■
  - いじめとどう向き合うか■
  - 学級崩壊をどう超えるか■
  - 学力をつけるとはどういうことか■
- という4つの項から成っています。

### ■生徒指導とは何か■

理論と実践と運動と！	NO. 153	教育を語る会
教育雑記帳	1989.4.24	

## 生活「指導」をめぐって

生徒指導なるものをめぐって物思うことの多いこの頃です。自分自身を整理する意味もあって、少し古いのですが1985年にぼくが生徒指導主任という係をしていた時に出した文書を再録します。

### 1. 生活「指導」の基本にかかわって

～とりわけ、同和教育と生活「指導」の関連についての一考察～

従来、本校の教育の中で、同和教育部と生徒指導部の間に、問題のとらえ方や指導のあり方をめぐって、意見の相違があった。昨年、生徒指導部は生活指導部と改称されたが、基本的に内容が変わらない以上、問題の根は深く残されていた。何年か前、「生徒指導はすべての教育活動の根幹である」と叫ばれたことがあった。82 年の糾弾会以降は、「教育活動の中で生徒指導が軽視されている」と言われるようになった。それらは、いずれも生徒指導部の側からの声であるが、今年度、生活指導が「部」としての機能を持たなくなったところで、そのことをもって両者のミゾがうまるとは考えられない。(注：この年、生活指導は校務分掌上の一つの係となった。)

ぼくは、生徒指導を生活指導と言いかえたことの意味を考え直してみることが必要ではないかと思う。

戦後教育において、生徒指導という用語が文部省によって使われ出す 1965 年ごろの歴史(1958 年に「道徳」の時間が特設され、1963 年に生徒指導主事講座を実施、64 年には全国に 100 人の生徒指導主事を配置、65 年に『生徒指導の手びき』刊行という一連の流れ)を引き出すまでもなく、一般的に、学級づくり(生活つづり方の方法を主として取り入れたもの)や学級集団づくり(集団主義の考えを取り入れたもの)の立場を「生活指導」という言葉で呼び、アメリカから入って来たガイダンス的(カウンセリング、適応指導)な立場を「生徒指導」と呼んでいる。もっとも現在の実践は多様であり、このような用語の説明で両者を区別するのは必ずしも当を得ていないかもしれない。「生徒指導」という言葉が再び用いられてきた歴史性に注目しながらも、ぼくがさらに注目したいと思うのは、戦後民主教育の息吹の中で確立していった「生活指導」の概念である。宮坂哲文は『生活指導と道徳教育』(1959 年)の中でこう述べている。「生活指導とは、ひとりひとりの子どもの現実にそくして、かれらが人間らしい生き方を営むことができるように援助することである。さらにくわしくは、生活指導とは、教師が子どもたちと親密な人間関係を結び、ひとりひとりの子どもが現実に日々の生活の中で営んでいる物の見方、考え方、感じ方ならびにそれらにささえられた行動のし方を理解し、そのような理解をその子どもたち自身、ならびにかれら相互間のものにすることによって、豊かな人間理解に基づく集団を築きあげ、その活動への積極的参加の中で、ひとりひとりの生き方をより価値の高いものに引き上げていく教師の仕事である。」生活つづり方を学級づくりに取り入れた生活指導の先駆者である無着成恭は、『山びこ学校』(1951 年)の中で次のように述べている。「本ものの教育をしたいという願いから、ほんものの生活態度を発見させる一つの手がかりをつづり方に求めて、教育を人類の歴史にてらし合わせて、正しく実行・推進するために、まず子どもたちに自己の生活の現実のすべてを認識させ、そこからより多くの人間を一層幸福にするには、どうしたらよいか、という

ことを考えることができる子どもをつくろうとした。」

生徒指導を生活指導と改めた思いは何だったのだろうか。確かに論議不十分なままの変更ではあったが、その思いは宮坂哲文や無着成恭の言葉の中に凝縮されているのではないだろうか。しかし現実はそうではない。そうでない現実を考え合いたいという思いをこめて、ぼくは生活「指導」とカギをつけた。「生活教育」とよんでみてもいいのではないかと個人的には思う。

〇〇小学校の同和教育は、子どもに正しいものの見方、考え方、感じ方の力をつけること、意識変革を単に意識の問題にとどめることなく、生活（行動）変革まで高めることを提唱してきた。その手段として生活つづり方の理論と方法に学ぶこともした。日記を書かせることの意味もそこに求めてきた。先に述べた生活指導が求めるものと、本校の同和教育が求めるものの間にどれほどの違いが存在するだろうか。「同和教育は教育の中核」だと言われる意味を問い返しつつ、ぼくは、「生活『指導』は同和教育の生命線である」と言いたい。両者の間に矛盾や対立が存在するとすれば、それは同和教育の深化と充実によって解決されるものだと思う。

## 2. 本年度の目標と課題

### (1) 本年度の目標

一人ひとりの子どもを深く見つめ、生活の現実を正しく理解し、さらに相互理解に基づく集団を築きあげ、その中で、確かなものの見方、感じ方、考え方ならびにそれに支えられた行動の仕方のできる生活者としての子どもの育成に努める。

### (2) 教師の実践・研修課題

- ①子どもの「荒れ」や「ゆれ」の背後にあるものを正しくつかむことに努める。
- ②「いじめ」に代表される集団の問題を分析し、とらえ方や指導のあり方を実践的に深める。
- ③豊かな人間理解を基盤にした集団のあり様を実践的に検証する。

### (3) 子どもの課題（子どもにつけたい力）

- ①自分自身や自分の生活を深く見つめるとともに、自分のまわりにいるなかまの思いに心を寄せることのできる力をつける。（そのために、日記指導や生活つづり方を大切にしたい。そして単に認識の変革に終わることなく、行動の変革に至るところまで教師は寄りそいたいと思う。）
- ②正しい判断力をつける。自分の頭で考え、判断し、行動する習慣をつけていきたい。（それが「きまり」をこえる「教育」であり、人間の尊厳を教える

ことだと思う。)

### 3. 具体的な活動にかかわって

#### (1) 月目標について

2. 3の子どもの課題を学年、学級で具体化し、1年間集中的に取り組んではどうかと考える。基本的には学級を軸にした指導であり、毎日の学級朝の会や帰りの会で具体化する。とりわけ学級で毎日のように決めている「今日のめあて」との関係については整理していく必要を感じる。

全校同一の目標は見ばえはよいものの、実効があまりなく、かざりものになっている一面のあることを反省し、廃止していきたい。

#### (2) 朝会、下校会について

##### ①朝会

全校児童と教師が一堂に会するという趣旨に徹し、時間内に終了し教室に入るという「原則」を守りたい。

a. 内容 略

b. 隊形および退場の仕方 略

##### ②下校会

土曜日（原則としてこれ以外は実施しない）の午後に子どもを校舎内に残さず一斉に下校させるために今年も下校会を残す。ただし、その目的は、分団の問題をつかめるという二次的なものはあるものの、「帰す」ことに徹し、話を聞かせたり訓練をする場にはしない。

a. 方法 略

b. 隊形 略

#### (3) 生活当番について

昨年一年間の現状とより学級を基盤にした生活「指導」の推進という二点によって、当面、「生活当番」（このよび名がふさわしいかどうかは疑問だが）の仕事は次の点に限定しつつ存続させる。

##### ①当番の仕事

・朝会、下校会の司会と運営

（実施するかどうかの決定や、放送連絡を含む）

・下校指導

##### ②当番の編成 略

#### (4) きまり（服装・生活）について

きまりについては、子どもに2. (3)でいうような力をつけていく過渡期の

めやすとして後日提案する。ただし、例えば髪の毛の問題は保健指導の面から子どもに返していくなど、できるだけ少なくしていく方向で検討を加えたい。

## 生活指導をどうすすめていくか 1985.12

### Ⅲ. 生活指導のすすめについて

例えば冬の服装で言えば、長ズボンは特別な場合に担任の許可を得てはくことに従来からなっていた。ところが実態は必ずしもそうはなっていない。毎年そうであり、今年もそうなのだが、被差別部落の子に長期にわたって長ズボンをはいている子が目立って多い。そのことをどう考えていくのだろうか。

例えば、何も部落の子に限ったことではないが、修学旅行の小遣いを多めに持たせる親がある。私たちは約束違反は違反としながらも、余分にお金を持たせる親の思いに心をはせた。それは、自分が子どもだったころ、みやげを買うお金を持っていけなかった、あるいは修学旅行に行けなかった親の話を知っているからである。

修学旅行にお金を持たせる親の思いも、子どもが寒いと言え（言わずとも、寒かろうと思）長ズボンををはかせる親の思いもわかるような気がする。さらに、「違反」によって、学校のもつ管理主義や閉鎖的なものに気付かされてきたことも少なからずあった。

しかし、一方でこんなことを思う。例えば、今春△中を卒業した〇〇小出身のI君は、わずか半年の間に4回転職している。H君も転職している。例年のことながら、高校中退や転・離職者の報告を耳にする。それらが悪いことだとは言わないが、あまりにもしんぼうできないこの子らの生き様をどう考えるのだろうか。

たしかに、それらの多くは幼年期からの親の子育てに原因していることは容易に想像できる。そして、そういう子育てになってしまっている原因もある程度理解できる。しかし、学校教育が、一層そういう子どもをつくっているということはないだろうか。

何も長ズボンがどうだと言うのではない。例えば、規則として長ズボンの着用を規制してきた中で、それを守れない子どもとどう向き合ってきたのかということが問題なのだ。さらに、甘やかしの背景は理解しながらも、その甘やかしが我が子をどう育てていくことになるかというところで本当に親とけんかをしてきたのかということが問題なのだ。あるいは、親の集まりである地域の中で、どれほどそういう議論をまきおこしてきたのかということが問題なのだ。

“規則だから守れ”という類の問題ではない。どんな子どもに育てるのか、今

子どもがどうなっているのかという視点から、子どもの生活（それをとりまく大人の問題も含めて）をどうしていくのかということを是非考えたい。

#### 《若干の補足》

生徒指導主任という立場上書き切れなかった問題と、この3年間で確信を深めた問題について、若干の補足をします。

まず、家庭生活の範疇に属することや個人のプライバシーに属することについては、原則として学校は介入すべきではないと考えています。前者に対しては越権行為であり、後者に対しては人権侵害であるからです。ここのところをきちんとさせておかねばなりません。

生活指導には、確かに集団生活における規律を身につけさせるという仕事があります。（規則やきまりの根拠はここにあるのだろうけれど、それは必要最小限の規律でいいのです。加えるとすれば、子どもの生命と人権を守るために必要なもの。この視点を欠くと間違いのもと。）しかし、生活指導にはもう一方の重要な、それでいて殆ど無視または軽視されている、仕事があります。それは、子どもを理解するという仕事です。少し丁寧に言うと、人はみな生活も悩みも考え方も違うのだということを、一人ひとりの子どもに則して具体的に分かり合うということです。分かり合うと言うのは、違いを受け入れるということです。実はこの部分こそが大事なのです。そういう意味で生活指導の基盤は学級にあり、ここがうまくいけば規則など若干の規律を除いて必要でなくなるのです。

理想と現実の間にあるギャップには当時も今も悩んでいます。しかし、だからと言って、規則に頼ろうとはぼくは考えません。

1985年に生徒指導主任を1年だけ担当し、2度目は2005年のことだった。職場の構成上、ここ数年は生徒指導担当が定着してしまったが、同和教育畑を歩んできた私には馴染みの薄いポジションであった。

1985年に相当思い切って提案した文書は、今も私の基本スタンスになっている。それどころか、子どもの人権をベースにした集団規律と児童理解という2本柱は、今や生徒指導の常識だ。



## ■いじめとどう向き合うか■

### 「いじめっ子」 その背景にあるもの

これは、1983 年 8 月、「いじめ」について初めて論じた文章です。時代背景としては古いですが、「いじめ」問題の本質、児童理解の本質は不変だと思っています。(2006.1)

#### はじめに

「いじめっ子」「いじめられっ子」という言葉がある。私はこの言葉があまり好きではない。理由は後で述べる。

いじめの問題を論じる時、多くの場合、「いじめられっ子」の側から述べられているように思う。私は一度「いじめっ子」の側からこの問題を考えてみたいと思う。そして、その中で何が「いじめっ子」を生み、何がいじめ行為に走らせているのかを少しでも明らかにできたらと思う。

#### A君のこと 孤独・疎外されて…

A君との出会いは、今から3年前の春、彼が5年生を迎えた4月だった。「しんどい子ども」だということと、「母親がわかってくれない」ということを前担任から聞かされていた。そう言えば、かつて彼の兄の担任と母親との間でもめた事件は私も聞き知っていた。始業式の日、彼の顔を見ながら、「何とかしてやろう」という思いと、「何事もなければよいが」という思いが私の中で交錯していた。

1年間、特に目立ったこともなく過ぎていった。そして、6年生の2学期。B君に対する集中的ないじめがはじまる。そのきっかけが何であったのか、双方にとって明らかでない。教師の前では決して見せることのなかったいじめの実態は……。

理由もなくなぐりかかる。ける。罵倒する。掃除用具入れの中に閉じこめる。そして、彼にとって何よりも苦痛であったろうことは、なかまと遊ばせないようにされたことであっただろう。つまり、彼と遊べばその者が攻撃されたのである。

しかし、B君は自分がいじめられていることを決して語らなかった。私は、彼の平静を装う表情の中に込められている思いを見ることができなかった。

そんな実態が明らかになってきたのは、B君が登校拒否の状況に追い込まれたことによってである。11月になって学校を休む日が多くなった。不審に思って聞いたが母親の前でも彼は事実を語らなかった。母親は何とか登校させようと叱責した。

彼は家を出て……しかし学校へは行かず、学校とは逆の方向に3kmも4kmも歩いた。たまたま出張先へ向かう教師によって彼が発見され、初めて事の深刻なことがわかってきたのである。

なぜA君は同じクラスのなかまであるB君をいじめ続けたのだろうか。

### ●背後にある複雑さを示す

彼には本当に「なかま」と言える友人がいなかった。孤独だったのである。友人がいない寂しさから、彼は力で人を従わせようとした。しかし、それは決して長続きせず、一定の期間が過ぎれば離れていった。離れていく「友」を彼は力で引きとめようとした。「友」はますます遠ざかっていった。こうして、彼の「友」は次々と変わり、……心の底は実に孤独だったのである。そして、常に疎外されているという意識が離れなかった。疎外感に彼を粗暴にし、暴力によって友は離れていった。まさに悪循環のくり返しであった。

A君のことを語る時、彼の家庭をぬきに語ることはできない。A君が暴力をふるったことより、A君に暴力をふるわせるような「もと」をつくった者が悪い。だからA君が暴力をふるったのは当然だ。……売られたけんかは買わねばならない。買ったけんかは勝たねばならない。そのためには手段を選ぶな。……これがA君の母親の「信条」だった。だから近所でもめごとがあつて、A君の家に言いに行ったりすると、たいていなぐられた子どもの親がA君にあやまることになった。そんなことが重なるうちに、近所の人たちはA君の家をさけるようになっていった。A君はそんな母親を見て育った。

「この子は本当に目の中に入れても痛くない子やね」母親がよく私に語った言葉だ。母親は心臓が弱く、二人目の子であるA君を妊娠した時、医者から産まない様にと忠告されている。しかし、彼女は、彼女の言葉をかりれば「あの子さえ産んでへんかったら、今ごろこんな小さな家に住んでへん。家とひきかえに産んでん」というほどの金をかけて、それこそ命がけでA君を産んだのである。そうして産んだ子であるから、特別にかわいがって育てたのは当然である。ただ、そのかわいがり方が問題であった。自分の思い通りにしている時には溺愛し、意のままにならない時には髪の毛をトラ刈りに切ってしまうたり、特別に仕立てたという通学服をズタズタに切り裂いたり……というせっかんをした。彼は母親の顔色を見て行動するようになったし、せっかんは、クラスのなかまへのいじめ行為に転じていった。

A君の母親はやくざの父をもつ家庭に育った。学校へも十分に行っていない。そのため字の読み書きもほとんどできない。そして、彼女もまたやくざの生き方をするしかなかった。そうした彼女にとって、家庭生活や子育ての「信条」は、自らが育ってきた家庭環境や自らの生き方しかなかった。そして、彼女から教育や社会生



活を奪ったものこそ部落差別だったのである。

「いじめ」という行為を肯定することも美化することもできない。しかし、A君の例は「いじめ」の背後にある複雑なものを私たちにを見せてくれるし、同時にまた行為のみを責めても問題解決にならないことを示している。

### ●子どもを分断した進学

ところで、A君がB君をいじめていたとき、クラスのまわりの子たちはどうしていたのだろうか。6年生の2学期までの間は、A君を「支える」集団が不十分ではあったが存在した。しかし、2学期のはじめ、彼がある大人との間でトラブルを起こし、それ以来荒れた状況を示すようになってからは、彼の支えはほとんどなくなっていた。同じクラスの彼ら、彼女らは、じっと息を殺してB君がいじめられるのを見守り、あるいは見て見ぬふりをし、害が自分に及ぶのを恐れていたのである。

「Bを見てただけでムカッとしてくる」とA君がもらしたことがある。B君はクラスの「優等生」の部類だった。中学受験を目指し、夜の10時ごろまで塾通いをしていた。一方、A君は底辺の子どもだった。これもいじめの一因であったようである。当時、クラスは「受験組」と「非受験組」に二分されていた。「受験組」は人のことより自分の点数が何よりもの関心事であった。「非受験組」とっては、校区の中学校が新聞ネタになる荒れの中で劣等感と不安感におそわれていた。こうした中学進学における子どもの分断も、A君のいじめをゆるしていった大きな背景である。

そしてまたB君も「受験」の犠牲者だった。彼に非常な期待をかける母親の前で自分がいじめられていることも語れなかったB君。「学校は休んでも塾へは喜んで行く」という母親。しかし彼は私にこう語った。「家にいたらうるさく言われるから塾へ行くね。塾へ行ってる間は何も言われへんから」と。そして彼は私立の中学校に進み、寮生活をするようになるのである。

### ●クラス仲間が立ち上がって……

B君が登校拒否状態におかれるようになって初めて、クラスのなかまが立ち上がった。私の何時間もの励ましの後、クラスの全員がA君に対する思いを語った。仕返しを恐れて沈黙を守ってきた子らが初めて語った。彼らの言葉の端々には、彼と一緒に歩もうという思いが感じられた。そして、自分のことが話題になるときまってボイコット・妨害をくり返してきたA君が、なかまの声を最後まで聞いた。終わりにA君が、もうくり返さないという決意を語った。なかまの自分への思いを知り、A君はそれ以来B君をいじめることをしなくなった。しかし、それは表面上のことであり、二人の関係が決して良くなったということではなく、またA君を本当にか

かえこみ変えていくことはできなかった。

A君は今中学2年生。「生徒指導」上の問題生徒としてよく名を耳にする。それでも、何度か小学校へ私を訪ねて来る。子どもの顔をして……。

「いじめっ子」「いじめられっ子」

かなりの紙数をさいてA君のことを書いた。それは、私が教師になって5年半あまりの間に、A君を通じて学んだことが実に多かったからである。

私は最初に「いじめっ子」「いじめられっ子」という言葉が嫌いだと書いた。理由が二つある。

### ●きわめて非教育的な言葉

理由の第一は、この言葉そのものがきわめて非教育的だということである。私は「いじめ」を「一方通行的な物理的（肉体的）・心理的（精神的）暴力」と考えている。ささいなことと思えること（当人には重要であるかもしれないが）で「暴力」をふるう子どもの行為は原則的に否定しなければならない。「暴力」をふるわせない指導をしなければならない。しかし、彼を「いじめっ子」と規定し、レッテルをはってしまう行為の中に、彼の思いを知ろうとする営みはあるだろうか。彼がいじめるという行為（行為そのものが間違っていることはくり返し述べておくが）によって訴えようとしているシグナルの中身を問う営みがあるのだろうか。

私が現在担任している6年生のクラスにC君という子がいる。彼もまた粗暴な言動が目立つ子である。そのC君が次のような作文を書いている。

#### 暴 力                  6 年 生   C

ぼくは、いつも友達に暴力をふるう。いけないことだと思うけど、ついついたたいてしまう。だから、ぼくはみんなからきらわれていると思う。

そして、ほんとうの友達ができない。まえ先生がいったように、一ぱつたかたれでもがまんするくらいの心がある。でもそれはできない。暴力はぼくのくせになっているのだ。なおそうと思っても、長い長い時間がかかるのだ。みんなとはなしでできるのはあと8ヶ月ぐらいだ。でも、どりよくする。みんながぼくのほんとうの友達になるようにあと8ヶ月ぐらいの短い時間の中で、みんなにすかれようと思う。

でも、ほんとうの友達になろうと思ってD君にCってよんでええでってゆうてもよんでくれない。それは、この5年かんのあいだにみんなにこわがられることをしたからだ。いまでは、そのことをこうかいしている。いまになってこんなこといったって、もうおそい。でも、これだけはみんなにやくそくする。むやみに暴力をつ

かわないとゆうことだ。これがこの5年かんやってきたことのつぐないだ。だけど、こんなことではゆるしてもらえないけど、いまのぼくにできることはこれくらいのことだ。ぼくは、どうしてこんなことをするかとゆうと、さみしいからだ。こんなことりゆうにならないけれど、ほんとうだ。これをかくすために暴力をつかうのだ。

いまいちばんほしいものは、ほんとうのともだちだ。ぜったいがんばる。あと8ヶ月ぐらいの時間の中で、ぜったいにほんとうのともだちをつくってみせる。この〇〇小学校で。みじかい時間の中で。

暴力をふるうC君も、「友達がいらない、さびしい」と叫ぶC君も、どちらも本当のC君である。つまり、彼は暴力という行為の中にさびしさをかくしもっているのである。私たち大人は、ともすれば「暴力」にのみ目を奪われがちである。そして、「非行少年」「いじめっ子」とレッテルをはりがちである。こんな言葉や行為は、彼を一層疎外し、暴力的にしてしまう以外にどんな意味があるだろう。彼らが深い深いところにもっている、そして、めったに見せようとはしない「心の叫び」にこそ耳を傾けられる教師であり、大人でありたいと思うのだ。

### ●黙認するまわりの子どもたち

理由の第二は、いじめは決していじめる子だけの問題ではないということである。いじめ行為をする子を「いじめっ子」と呼ぶなら、それを結果的に黙認している多くのまわりの子らもやっぱり「いじめっ子」ではないのだろうか。私はこのまわりの子らにこそ問題があるのだと思う。もし、クラスの中に「暴力」を許さない気風があれば、いじめられている事実を見過ごすことはなかっただろう。もし、「暴力」をふるう子を予断や偏見で見ることがなければ、疎外していくことがなければ、彼は「暴力」的になることもなかっただろう。つまり、「いじめっ子」をつくり出し、「いじめっ子」を見すごしていくまわりの子たちの中にこそ「いじめ」の問題の本質があるのである。

### 「いじめ」の背景にあるもの

「やさしさ」や「思いやり」のない時代だと言われる。毎日の生活の中では思わずドキッとさせられるようなやさしさやしなやかさに出会うことがある。しかし、全体として見れば友達関係が疎遠になっているのは事実である。なぜそうなのだろう。

### ●一つは大人社会の反映

一つには、大人社会の反映だと言えるだろう。私の家は日舎にある。その私の家で、私が小学生のころ（今から16年前に6年生だった）にあったこと……何軒かが共同で田植えをし、それが終わると盛大に宴会をした。秋もそうであった。めずらしいおかずがあればよく小鉢に入れてもって来てくれた。となりのお婆さんは私の家のことを家族以上に知っていた。そして今……農作業は機械まかせの日曜百姓。みんなが現金めあての勤めに出、私は、2年前に結婚したとなりの幼なじみの奥さんと未だに言葉もかわしたことがない。この16年間は一体何だったのだろうか。確かに物は豊かになった。生活は便利になった。スマートにもなった。しかし、前よりも一層あくせくと働くようになったし、生活が忙しくなった。山深い田舎でさえそうなのである。この大人社会の変化が、大人たちの中で大人を見ながら生活している子どもの心を貧しくしてしまったことは容易に想像できるであろう。

### ●二つには受験競争の結果

二つには、学歴社会の受験競争の結果だと言えるだろう。受験体制のワクの中に、中学生のみならず、今や小学生までが組み込まれ、点数と順位、偏差値によってしか個人が評価されなくなっている。「個性」は部分的には認められるにしても、“最終目標”である受験の場においては、すべて切りすてられてしまう。そうして、すべての子が同一の目標にむかって競走馬のように走り続け、となりの子に勝つか負けるかが人生をも決めてしまう。塾が「放課後」の大半を占める生活において、子どもたちは本当に友と交わるということを知らない。これも決して子どもの責任ではないのだが。

いずれにせよ、人間疎外が進んでいるのは事実である。そして、となりの席にいる子のいたみを思いやれない友達関係の疎遠こそ、「いじめっ子」「いじめられっ子」を生む土壌である。確かにいじめに走る個々の子どものかかえもつ課題はある。しかし、個々の子どもへの“対症療法”は、この問題の根本的解決には決してならない。もっともそれさえも十分に行われていない現状において（私も含めて）、“対症療法”を軽視せよと言うのではないが。だが、「土壌」をこそどう耕しどうかえていくのかということを、どんな人間に育てていくのかという視点に立って、置かれている立場の違いをこえ真剣に考え合わねばならない。

### おわりに

このように見てくると、「いじめ」の問題は、きわめて大人の問題だといえることができる。現象は子どもの中に現れてはいても、それは大人社会の矛盾が形を変えた

ものに他ならない。要は、私たち大人がどれほど人間らしく生きるか、人間らしく生きる権利をとりもどすかということにかかっている。そのためにはそれを阻害しているものを取り除いていくことも、また大人の責任である。

子どもは、しなやかに、しかし鋭く見つめている。私たち大人をも……。

#### Eさんの日記

今日の一日はFさんにとりつかれたみたい私だった。Fさんはとっても心がやさしいんだなあと思った。Gさんが一人にいる時もFさんとはとんでいってあげたり、弱い者のくやしきは本気になって考えてくれる。自分がいっしょにすねるのではなく、考えをきちんと持って相手の所へ立ち向かってくれる。相手が自分の悪さに気付けばFさんは自分が悪かったといって反省している。Fさんはとてもいい友だちだ。この学級をみんなで語りあえる仲間いっぱいになりたい。

～ 『少年補導』1983.11号所収～

1983年当時、いじめ問題は「いじめっ子」と「いじめられっ子」の問題として語られていた。いじめられる側にもそれなりの原因があると捉える風潮は、こうした問題設定の中で幅を利かせていた。

私は、拙文の中で「周りの子どもたちの問題」を取り上げている。これは、部落差別を考える際の視点から学んだものだ。部落差別には、被差別の当事者と差別事象を起こした当事者がいて、その周囲に無数の傍観者が存在する。傍観者は主観的には差別などしていないと思っているが、客観的には差別を許す土壌を構成してしまっている。つまり、積極的に差別をなくそうと働きかけなかったことで、結果的に差別を温存する一翼を担っているわけだ。差別問題には、「差別をする側」と「差別をなくそうとする側」の2つしかなく、社会の構成員である限り傍観者という第三者的立場などあり得ないのだ。

これをいじめ問題に置き換えると、積極的にいじめをなくそうと働きかけない限り、傍観者はいじめる側に身を置いていることになる。集団の構成員である限り、傍観者という第三者的立場などあり得ないのだ。「ばんざいじっさま」「くびなしほていどん」「かっぱのめだま」「おこんじょうるり」など、さねとうあきらの作品をいくつも授業に使ってきたが、「傍観者」の位置にある者の責任を自問させたかったからだ。

いじめを集団構造の問題として明確に示してくれたのは、森田洋司さん(当時、大阪市立大学)だった。

「いじめている子」「いじめに荷担している子」「いじめられている子」「いじめを傍観している子」と集団の層を分析し、これをいじめの4層構造とよんだ。

今日的状況下で30年前の文章を読み返すと、いじめられている子への言及があまりにも弱い。多分、いじめられている子へのフォローそのものが足りなかったのだと思う。もちろん家庭訪問もしていたし、語り込みもしていた。しかし、「何があってもきみを守る」という芯のようなものが、記憶の中に蘇ってこない。

今ではどの学校にも「いじめ対策委員会」なる組織があって、「いじめ対策アクションプラン」などの対応マニュアルがある。学校が組織としていじめにあった子を守る仕組みが整ったわけだ。――「いじめ対策」においては、ここが核心部分である。

しかし一方で、今日のいじめ対策は、およそ教育的営為とは言い難いと私は思っている。見えてくるのは、万が一の訴訟対策といじめた者を排除する警察型管理主義だけだ。集団づくりの視点が、まるで欠落している。

若い世代のみなさんに言っておきたい。

日本は間違いなく「訴訟社会」に向かっているし、ことが起こればトコトン追及を続ける保護者(ただし、人の親を「モンスター」などと呼ぶなかれ!)もいる。我が身を守るには、きちんとした記録を残すことだ。そういう意味での対策は怠ってはならない。

しかし、「対策」は緊急避難であり、教育ではない。いじめ問題のキーマンは、間違いなくいじめの中心にいる子だ。その子の抱えている課題と向き合い、集団の中にできた層を解きほぐし、子どもたちを繋ぎ直していくことこそが、私たちのしごとだ。肝に据えておいてほしい。

## ■学級崩壊をどう超えるか■



# 「学級崩壊」をスタートラインとして ～何がこのクラスの課題なのか～

これは、2009 年 8 月に書いた文章です。2008 年度に学級が崩壊したまま年度末に至り、その後を受けて担任した 5 年生 1 学期の記録です。

## 1 昨年度の様相を読み解く

尾木直樹氏は、『「学級崩壊」をどうみるか』（NHKブックス、1999 年）の中で、全国の 200 ヶ所近い学級崩壊現場で見た実態から、次のような学級崩壊調査項目私案としてまとめている。

### 〈授業崩壊の 10 の指標〉

- 1 授業中の学習に関する教師の指示が通らない。
- 2 授業中の立ち歩き、外出がある。
- 3 授業中の私語が多く、教師の注意でやめない。
- 4 授業中の口げんか、小暴力が発生したとき、教師の指示で静止できない。
- 5 チャイム(時間)でほぼ全員が前を向いて着席し、教科書、ノート類を出していない。
- 6 授業中、誰かを冷笑したり、はやしたり、隠れた「いじめ」が発生しているのを教師はストップできない。
- 7 明らかな授業妨害、担任「いじめ」に対して周囲の子が同調している。
- 8 授業中、堂々とマンガを読んだりおもちゃで遊ぶのをやめない。
- 9 配布したプリントをわざと破ったり、丸めて床に捨てるのをやめない。
- 10 教師の注意を無視したり、反抗したり、時には暴力をふるう。
  - 「毎日のようにある」「2、3 日おきにある」が 5 項目以上に達したら「学級崩壊」の赤信号
  - 同じく 7 項目以上になると緊急に対応策を打つべき

昨年度の 1 学期後半及び 2 学期後半、4 年生のクラスに入り込みをした際の観察で言うと、上記 10 項目のすべてが当てはまっている。3 学期には管理職以外の入り込みは行っていないが、状況はほぼ同様であった。つまり、事態が明らかになった昨年度 6 月以降、9 ヶ月間にわたって極めて深刻な学級崩壊が継続していたということである。

## 2 学級崩壊はなぜ起こったか

尾木氏は、同書の中で『学級崩壊』の基本問題」として学級崩壊を次のように定義している。

### 「学級崩壊」の基本問題

- ①「学級崩壊」の定義のポイントは、「一人担任制」による「小学校問題」であり「学級全体」の「授業不成立」現象である。
- ②「キレる子」「荒れるクラス」「指導困難学級」「中学・高校・大学」の授業崩壊とは区別する。
- ③小学校「低学年」と「高学年」の「学級崩壊」は背景も脱出法も違う部分が多い。
- ④特別な「引き金」になる子の問題ではなくて、むしろ同調思考の多数の子どもたちの発達上の問題である。高学年は、思春期特性と担任への「いじめ」として発生する。
- ⑤子どもの発達上の問題であると同時に、学校の画一主義や学びの方法との矛盾でもある。
- ⑥母親からの「良い子」ストレスが大きい。就学前教育にも注目すべきである。

その上で、低学年と高学年の特徴を次のように整理している。

#### ■低学年の特徴

- ①自己中心的・衝動的パニック現象(セルフコントロール不全)←愛情不足
- ②コミュニケーション不全(小暴力)
- ③基本的生活習慣の欠如
- ④良い子ストレス
- ⑤“崩壊”よりも集団の未形成状態

#### ■高学年の特徴

- ①教師への不満・怒り(差別・不公平)
- ②学習からの逃避
- ③思春期ストレス(自立への不安)
- ④ピアプレッシャー(同調圧力)
- ⑤私立中学校受験勉強による心情不安
- ⑥担任教師へのいじめ構造

(下線は草尾)

尾木氏の学級崩壊の定義や、低学年と高学年の特徴が重なって現れる中学年の特徴を肯定的に受け入れた上で、なおかつ疑問が残る。教師にとって「しんどい子」や大変な状況は、大なり小なりどのクラスにもある。しかし、しんどいクラスが悉く崩壊しているわけではない。では、昨年度の4年生のクラスはなぜ崩壊した？

学級崩壊のきっかけには、あらゆる種類の無秩序な言動をする、一人または数人の突出した子どもの存在がある(尾木氏はこれを「引き金になる子」と表現している。「しんどい子」と同義の言葉である。)が、他のこどもたちがそれに同調せず、教師の指導に従っていれば、崩壊は起こらない。「最初の〈引き金っ子〉たちに引きずられて、他のこどもたちも同じような心情にかられたり、同一行動に出たりすれば、学級全体の統制は崩壊する。」(『子どもの危機をどう見るか』(岩波新書、2000年)引き金っ子からの同調圧力(ピア・プレッシャー)を受けて、他のこどもたちが同じような行動に走り、しかも、それが2週間、3週間も続くと、担任個人の力では立て直しが困難な、典型的な学級崩壊となる。したがって、崩壊のプロセスには、①「引き金になる子」の存在、②他のこどもの同調圧力の強さ、③崩壊期間の継続時間帯という3つの要素があるという。

ここでは、①の「引き金になる子」は問題ではない。そうしたこどもは昔から存在したし、どのクラスにも存在するからだ。

「③の崩壊時間が問題になっているのも、自制心の弱い四〇人が、一斉に沸き立ったとしたら、一〇分も一五分も規律のない状態が続き、とても授業どころではない。…崩壊現象の質が問題なのだ。クラスにいじめがあったり、担任への信頼感が弱い中・高学年のクラスでは、この状況が授業を壊すほど致命的な結果をもたらすのだ。」(『「学級崩壊」をどうみるか』)それが2週間、3週間も続くと典型的な学級崩壊となるという。このクラスは、それが9ヶ月続いた。

さて、学級が崩壊するか否かの決定的要因は、周りの子たちの同調圧力(ピア・プレッシャー)にあるようだ。「引き金」があったとしても、他の子たちが同調しなければ授業は成立し、「引き金」になった子も落ち着いてくる。問題は、その他大勢の引きずられやすい「フラフラっ子」の存在である。逆説的に言うと、なぜこのこどもたちの自立心を鍛えられず、他者認識力やコミュニケーション・スキルを高められなかったのかという、崩壊の遠因となっている背景が浮かんでくる。

### 3 学級崩壊からの脱出

## 学校の脱出プログラム

### ①子どもと大人(教師)との関係性の転換（子ども観の転換）

教師から見ればたとえ否定的な現象や振舞いではあっても、それは、子どもたちが教師に伝えたい何かギリギリのメッセージや叫びであると受けとめることができるかどうかである。

「良し悪し」をあせって判断しないで、まずいったんすべてを受け入れること。…「どうしたの？」と教師側から心を開くことだ。そうすれば、子どもも教師の対等な息づかいを感じて心を開いて語り出す。…行為には共感できなくても、気持ちには、そのまま寄り添うことだ。

### ②授業づくりの転換（授業観の転換）

「学級崩壊」から脱出するための要は、授業にあるとわかっていい。授業の内容、方法論としての教授法、授業システムの三つの領域を徹底して見直してみることだ。

### ③一人担任制をやめる（担任観の転換）

### ④低学年と高学年を区別する（指導観の転換）

### ⑤情報公開と父母・他教師との連携と子ども参画の学校づくり（学校運営観の転換）

## 家庭における子育ての基本－10の視点

### ①学校に頼りすぎない＝学校的価値と文化からの脱却をめざす→子どもの居場所としての親と家庭がつくれる→心が安定し、学校でパニックにならない

### ②家庭の交流を創るシステムを工夫する

### ③父親を「会社人間」から「家庭人間」へ取り戻す

### ④「良い子」ではなくて「あるがままのわが子」を受けとめる→ホッと安心して伸びる子

### ⑤「指示」や「小言」より「聞く愛」を→いつも聞いてもらっている子は先生や友だちの話を目を見つめながら聞けるものである

### ⑥自己責任能力を身につける→その前提として「自己決定」場面を増やす

### ⑦遊び体験の重視→自己表現、人間認識、信頼、トラブルのくぐり抜け方

### ⑧家庭のモラルの確率→叱る基準

### ⑨子どもとともに生きるパートナーシップ→友だち親子からステップアップ

### ⑩基本的な生活習慣の確立→集団性、統一性の回復 … 学級崩壊からの脱出との兼ね合いでは最も重視すべきポイント

（下線は草尾）

尾木氏は、前掲書において、学級崩壊からの脱出プログラムとして5つのポイントを提示している。その背景には、社会や子どもの変化に対応しきれなくなっ

たこれまでの価値観や根強い伝統が、学級崩壊という現象を生み出しているという氏の分析が読み取れる。そして、社会の変化との関連で言うと、幼児期の①基本の生活のくずれ(食・遊・寝)②他者との交わりの欠如(遊びの喪失、少子化、おけいごとと通い、早期教育)③親子関係の不全(丸ごと受容の消滅、スキンシップの欠如)という3つの「くずれ」を挙げ、学級崩壊からの脱出の第②のポイントとして、「家庭における子育ての基本ー10の視点」を提示している。

昨年度の4年生教室の“異変”に廊下から気付いて以降、管理職を中心に職員集団は実によく関わった。にもかかわらず、学級崩壊から脱出できないまま修了式を迎えた無念を総括しなければならない。

まず第1に、子どもたちの「メッセージ」や「叫び」を最後まで聞き取れなかったということだ。担任の回想によれば、「引き金」は学級開きから1月も経たない時期の席替えをめぐるトラブルだという。その際に感じた不公平感が担任への不満として尾を引き、周囲の同調によって学級全体に広がっていったのである。職員集団が「引き金」と考えられる“事件”を知ったのは、随分後日になってからのことではあったが、遂に子どもの心に寄り添うことなく終わってしまった。私たちは、子どもたちを席に着かせ、静かに授業を受けさせる「圧力」としてしか機能しなかった。

第2に、学級崩壊に対する認識のなさと対応の遅さの問題がある。「引き金」から2、3週間も続くと典型的な学級崩壊になるというが、私たちが廊下から教室の“異変”に気付いた時点では6週間が経過していた。担任の苦悩は察して余りあるが、この時間経過が事態を深刻化かつ長期化させていったと考えられる。さらに、この時点で職員集団に学級崩壊について十分な認識があれば、子どもたちを押さえ込むことに終始することはなかっただろう。また、臨時学級懇談会も2学期後半ではなく、1学期中に開かれていたかも知れないし、懇談内容も「説明」よりも「協力要請」に重きを置いたものになっていただろう。

第3に、教員関係の甘さということに言及せざるを得ない。年度途中での担任交代ができない以上、担任が踏ん張るしかない。職員集団は全力で担任を支えなければならない。支え方には2通りある。1つはいたわりに根差したものであり、もう1つは厳しさを伴った助言だ。私たちの場合、後者はどれほどあったろうか。同僚としては気の毒に思うが、客観的に見れば被害者は子どもたちだ。私たちには事態を解決する責任がある。最前線で子どもたちと接する担任の子どもの見方、教室での表情、声のトーン、授業の進め方等々の1つ1つが変わらない限り、子どもとの関係を結び直すことなど叶わない。私たちは、子どもたちには時として威圧的に向き合ってきたが、担任とはどう向き合ってきたらう。管理職は言うに及ばず同じ職場の先輩として、学級崩壊に呻吟する若い担任をどれほど育てられたらう。

## 4 学級崩壊を超える 1 ～規律回復～

### (1) 「学級崩壊を超える」ということ

学級崩壊は小学校における一人担任制のもとで起こる現象であるから、担任が替わることで事態は大きく変わる。しかしそれは、前担任との間の「ギクシャクとした関係」が取り除かれるからであって、個々の子どもや子ども集団が一変するわけではない。「学級崩壊を超える」というのは、一義的には学級の規律を回復することであり、本質的には「フラフラっ子」たちの自立を支援することだと考える。

### (2) 学級の規律回復

5年生の始業式、喧噪の中で学級開きを迎えた。翌朝、教室の窓から目にしたのは、一人の子の登校を校門付近で待ち受け、揃って教室に向かう異様な光景だった。3日目の朝、登校してきた子どもにベランダから声を掛け、その都度教室に入らせた。力関係で言うと、担任の強制力は通用する。最初の1週間で学級は劇的に変化した。表面上は…。

学校が始まってから1週間がたちました。この1週間でよくなったところは、あばれたりしないことです。もう1つは、けんかをしなくなったところです。5年生になるまでは、けんかばかりしていたけど、5年生になってからけんかをしなくなったことがよくなったなあと思いました。前までは、授業中に先生の話の聞かないであばれていたけど、5年生になってから、あばれなくなったことがよくなったなあと思いました。これからも続けてほしいです。(S i A女子)

驚いたことに、アンケートをとってみると学級集団に対する自己評価が非常に高い。わずか3人の女子を除くと、15人の男子にとっては「みんな一緒に遊ぶ」「団結力のある」「元気のいい」誇りうる学級だったのだ。転入してきたばかりの4人目の女の子は、その騒々しさにただただ閉口していた。担任である私の思いと、子どもたちのそれは、この時点では大きくズレていた。

4年生の時、女子も含めすべての子が、毎休み時間に野球ゲームに打ち込む姿が気になっていた。子どもたちの言う「団結力」の正体はピア・プレッシャーなのだが、これについては後で述べる。クラスには、登校を待たれていた子を頂点にして幾重にも層ができていた。その中でケンカが遊び化し、「アホ、ボケ、死ぬ」といった言葉が飛び交い、いじめや暴力が恒常化していた。

学級開きで学年つうしん『』（「AAA」…「スリー・エー」と読



む)を配布した。野球少年たちの心を掴めるかどうかは分からないが、担任が決まってから考え抜いたネーミングだ。そこにはこう書いておいた。

このタイトルは、みなさんへの強い思いを込めて付けました。AAAは、メジャーリーガー(野球のナンバーワン)をめざすアメリカの野球リーグのことです。夢が実現するかどうかは、努力次第です。ぼくたちもまた、ナンバーワンのクラスをめざすAAAチームです。ナンバーワンになれるかどうかは、努力次第です。

ナンバーワンのクラスになるにはどうすればいいのでしょうか。実は「AAA」の文字にそのヒントがかくされているのですが、今はまだ内緒です。改めて話すことにしましょう。あれこれと想像をめぐらせてください。

めざせ、ナンバーワン！！

1週間後の4月13日、『AAA』No.3(「AAA」はクラスの合言葉!!)でいよいよ担任の思いを語った。

### 「AAA」の「A・・」あたりまえをきっちりやり切ろう

始業式の日にしたアンケートで、男子の多くは「みんなで遊ぶ、とてもいいクラス」だと答えました。一方、女子は「授業に集中できない、あまりよくないクラス」だと答えました。これは、「ものさし」のちがいによるものです。先生方や他の学年の人たちは、女子と同じように感じていました。

まず、クラスの「ものさし」を1つにそろえます。学校は勉強をするところです。授業に集中し、みんなでかしくなっていくクラスが目標です。そのためには、学校の「あたりまえ」が一人ひとりの「あたりまえ」になり、それをきっちりやり切ることが大切です。

そこで、毎日の生活の「ふりかえりカード」を作りました。学校の3つの約束でもある「大きな声であいさつする」「人の話をしっかり聞く」「トイレのスリッパをそろえる」と、「宿題をきちんとする」「学習の用意をする(忘れ物をしない)」を、1学期のめあてにします。他にもきみたちの課題は山ほどありますが、まずはこの5つをパーフェクトにやり切りましょう。そうすれば、他のことの多くもきっとできるようになると思います。がんばりましょう。

### 「AAA」の「・A・」あたたかいハートで生きよう

仲のいいクラスというのは、一緒に遊んでいるクラスのことではありません。仲のいいクラスとは、だれもが安心して過ごせるクラスです。私たちのクラスは、安心できる場所でしょうか。

ちょっとしたことでたたいたり、けったりする人はいませんか。からかったり、バカにしたりする人はいませんか。答えをまちがえた時に、笑う人はいませんか。走りがおそかったり、ゲームにうまく参加できなかったりした時、責める人はいませんか。…もしもそんな人がいたら、安心できません。心配なことがあると、思いっきり自分の力を出すことができません。

あたたかいハートで生きるというのは、分からないことやできないことを、教え合ったり助け合ったりすることです。あたたかいハートの人、やさしい人です。やさしい人が多くなると、教室の空気がやわらかくなり、やさしいクラスになります。そんなクラスを作りましょう。

### 「AAA」の「・・A」あしたのために今日をがんばろう

学校は勉強をするところです。そして、5年生は小学校の勉強のヤマ場です。今年は、勝負の年です。「あしたのために今日をがんばろう」というのは、その日その時の授業(課題)に集中して取り組もうということです。

1学期は、5年生の勉強と同時に、4年生までの復習をてっていします。月～金曜日の宿題である「音読」は、5年生の国語教科書を使います。火～金曜日の「朝モジュール」では、教科書を使わない「音読」、「百マス計算」、「漢字テスト」をします。1学期の「漢字テスト」は、3・4年生の復習です。さらに、総合の時間を使って、4年生までの計算の力をのばします。やることがいっぱいで大変なのは分かっています。でも、今がんばらなければ取り返しがつかなくなるのも事実です。ぼくを信じて付いてきてください。しんどかったけど、やってよかったと言える日が必ず来ますから。一緒に、せいいっぱいの努力をしましょう。

学級が崩壊していた期間、子どもたちは自分たちの「ものさし」を作り上げ、その枠の中で生きてきた。学校生活の中心は遊び(野球ゲーム)であり、もめ事に勝つことだった。授業時間は、さながらゲームの休憩時間で、したがって唐突にゲームのメンバーや作戦が話題になっていく。――この「ものさし」を学校の「ものさし」に戻さなければならない。学級の規律回復というのは、ダブルスタンダードのベクトルを1つに揃えることだ。文章にすればそれだけのことだが、これには相当なエネルギーと時間を費やした。

### (3) ピア・プレッシャーとのたたかい

ピア・プレッシャーによる同一年行動が長期化の中で、集団のルールが出来上がっていく。そのほとんどはピラミッド化した学級の層を支える不文律であったが、

時には学級会という「民主的手続き」によるものもあった。そして、集団のルールが学校のルールを超えてしまうところに、事態の深刻さがある。

4年生の初めまで鉄棒で遊んでいた3人の女子が、ある時期から男子に混じって野球ゲームに参加するようになった。「学級会でみんなでやる。」と決まったかららしい。3人はどう思って、毎日毎日運動場へ出ていたのだろう。5年生になって数日後、そのことを聞いてみた。彼女たちは、フフと微笑んで、何も答えなかった。

クラスの中ではまじめな方の男の子が、昼休みの委員会活動をサボった時の話だ。「なぜ来なかったの？」と担当の先生に聞かれて、彼はこう言ったそうだ。「野球ゲームがあるので委員会には行けません。」教師は、「委員会と遊びとどっちが大事なの？」と当然聞き返す。彼は真顔で言う。「ぼくはクラスで12番目なので、11人の人の許可がなかったらゲームを抜けて委員会に行くことはできません。」集団のルールが学校のルールを超えることの1例だ。(私の集団分析は、彼の認識と少し違う。ピラミッドを構成しているのは11人で、「引き金」となった子はピラミッド構造と複雑に絡みながら不即不離の位置にいた。この子に一人が帯同していたが、集団での位置は厳しかった。別の一人はそれらとは一定の距離を保ちつつ付き合っていた。3学期に転入してきた子の立ち位置は、相当厳しかった。ーーと、私は見ている。)

ピラミッドの「頂点」に位置する子は、決してボスの君臨者ではなく、みんなを仕切っているようにも見えなかった。しかし、彼に言われて、あるいは彼の顔色をうかがって、ゲームでミスをした子に制裁を加えていた事実は、彼の影響力の大きさを物語っている。私はまず、自分がこのピラミッドの「頂点」に立つことにした。そして、彼のプライドを大切にしながらも、集団における役割を軽くしてやろうと考えた。その上で、ピラミッド構造を崩し、もう一度仲間として繋ぎ直していくというのが、私の設計図だ。それは、長期に及んだピア・プレッシャーとのたたかいであった。

## 5 学級崩壊を超える2 ～自立支援～

### (1) クラスの課題は何か

規律回復で学級の「カタチ」を整えるのと並行して、クラスの「ナカミ」を形作っていく必要がある。「ナカミ」を形作るとは、学級崩壊の背景にある集団の課題に切り込むことだ。

気になる子どもの姿がある。いわゆる「できる子」に安定感がない。よい子ストレスも読み取れる。一方、学習に課題を持つ子たちの自己肯定感が極めて低い。

「勉強なんかできなくてもええね。」「野球さえできたらいいとお父さんが言うてる。」と逃げ道を作りつつ、できないことが気になっている。総じて言える課題は、自尊感情を育て自己効力感を高めることに尽きる。それが子どもたちの自立を支援することになるのだと思う。具体的には、信頼と協力を軸にした集団作り、学力アップを実践課題に掲げた。

教室の取り組みと並んで、家庭の教育力を回復することも重要な柱だ。

## **(2) 教室を心地よい居場所に**

### **① 学級通信はクラスの潤滑油**

学級を誰もが安心して過ごせる場所にしたい。それは、子どもの力が十分に発揮されるための必要条件だと考えるからだ。私の学級づくりのベースの部分だ。

1枚文集としての内容を持つ「学年つうしん」は、それを支える重要なツールである。友だちの作品を読み合うことで、友だちの内面を知り、時には共感が生まれる。やがてはそれが価値観の共有になり、クラスの連帯感や一体感につながる。

「学級文化」が育つ土壌は、そうした積み重ねの中で作られる。

例年に比べて時間はかかっているが、4ヶ月も経てば子どもたちの関係に「潤い」を感じられるようになってきた。

### **② Q－Uの活用**

学級開きから1ヶ月の時点で、Q－Uを実施した。学級満足度を分布図にまとめてみると、学校生活満足群が53%(全国平均38%)、学校生活不満足群が32%(同26%)、被承認群が5%(同18%)、侵略行為認知群が10%(同18%)で、要支援群に入る子はいなかった。学校生活意欲分布では、「友だち関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」ともに全国平均値と誤差の範囲内の数値になった。概ね良好な回復過程にあると見てよい。

個々の子どものデータを検証すると、問題の深さが浮かんでくる。大きく2つの傾向が読み取れる。1つは、ピラミッドの上位に位置した子どもたちの被侵害得点が高い傾向にある。その中に成績上位群の多くが含まれるが、その子たちの承認得点が低い。ここからは、人間関係作りの課題や良い子ストレスの問題などが浮かんでくる。もう1つは、学習に課題を持つ子たちの承認得点が高く、学校生活満足度も高くなる傾向がある。これは自己目標の低さに起因すると考えられ、自己理解や意欲付けの課題が浮かんでくる。

### **③ SGE等でリレーションシップを築く**

具体的な活動を通して、友だちと協力すること、友だちを信頼することを学ばせたい。暴力で結束してきた集団を、協力と信頼でつながった集団にしたい。

リレーションシップを築くプログラムとして、S G E (構成的グループエンカウンター)やGWT (学校グループワークトレーニング)を採り入れることにした。

1 学期、とりわけ子どもたちに好評だったのが「人間コピー」だ。廊下に掲示された元絵を交代で見に行き、できるだけ忠実に複製を描き上げるゲームだ。レベルを上げながら3度行っただが、毎回非常に盛り上がった。ゲームの後の振り返りで、ある子は「みんなで協力してやっている、班の団結力が強くなると思った」と感想を書いていた。体験の1つ1つが子どもの心の栄養になれば、と願う。

#### ④ “ベストフレンド”で仲間を繋ぐ

1 学期の半ばから、“ベストフレンド”というのを続けている。朝の会の時、日直はくじを引いて今日の「ベストフレンド」を決める。日直は、1日のうちに「ベストフレンド」に対して3つ以上、相手を喜ばせることをしなければならない。終わりの会で、日直は「今日のベストフレンドは誰でしょう」と聞く。自分だと思ふ子は起立し、理由を言う。起立者がなければ、日直はノートに書き留めてある自分がしたことを発表する。心当たりの子が名乗る。ーそういうゲームだ。

男子が女子を引き当てた日などは、殊の外おもしろい。時には、フェイントと称して何人もの子に親切をし、攪乱しようとする子もいる。マンネリには気を付けなければならないが、結構盛り上がる。

所詮は遊びである。しかし、それによって意識が友だちの方に向かうなら、それもありだ。理屈っぽい同和教育教師の過去は、封印した。

7 月、キーパーソンの一人である子が、「これからの社会」という作文の後半にこう書いた。「5年生になって、ぼくたちは、友だちのことを前よりはやさしい気持ちで考えられるようになったような気がする。一人一人が思いやりの心を持つことで、けんかは少なくなると思う。ぼくがけんかをした時止めてくれたように、ぼくも友だちがけんかをしていたら止めようと思う。そして、世界中の人が、やさしい気持ちでいられたらいいなと思う。まず、ぼくは、このクラスのみんなといっしょに助け合っていきたい。」

### (3) 学力アップで自信を取り戻す

#### ① 朝モジュールで学習リズムを取り戻す

火曜日から金曜日の1時間目の冒頭を、「朝モジュール」の時間にしている。朝モジュールは、「音読」「百マス計算」「漢字テスト」の3つで構成している。

「音読」は、規律の乱れた学級で一斉にこちらを向かせるのに極めて有効だった。口ごもることの多い子どもたちに、「五十音」の詩で何度も発音・発声練習を繰り返した。数え歌は、いくつものバリエーションを展開することで子どもを乗



せ、隣の教室がうるさいほど声が出た。1学期の後半は、「枕草子」に取り組んだ。高度な文章が、子どもの挑戦心をくすぐった。ほとんどの子が、冬のくだりまで暗唱してしまった。

「百マス計算」は、集中力と暗算力をねらいにしている。全体的に見ると、タイムが想定値よりも遅い。その分、今後の伸びしろが大きいとも言える。

「漢字テスト」は、目標を定めて努力する家庭学習の定着をねらいにしている。6月頃から、思惑通りに頑張る子が多くなってきた。励ましと賞賛のスタンプを多用し、まあ、似合わぬ努力もそれなりにしている。

全体としての朝モジュールは、脳を目覚めさせ学習モードをスイッチ・オンするのがねらいだ。朝の休みに動き回ってきた子どもたちは、この時間帯で完全に切り換えができるようになった。功を奏している。

## ② 班学習で学力と信頼関係を取り戻す

始業式の翌日、四則計算の復習テストをした。そして、その結果の低さに愕然とした。全体に低く、低位者の層が厚い。「班学習」という発想は、担任一人では対応しきれない実態からの発想だ。5つの班を作り、教え合いの態勢を作った。教え合いが成立するのかどうか若干の不安はあったが、子どもを信じなければ何も始まらない。

総合の時間を学力補充に充てることにした。算数で小数のかけ算・わり算を学習するまでに、計算力のメドを付けることが目標だ。系統的にプリントを用意すると同時に、できたことを視覚化することで自信につながる「工程表」を作った。

班学習は、子どもたちの学習風景を変えた。算数が苦手な子たちがプリントに食いつくようになり、それを得意な子が支えた。子どもたちの姿に後押しされて、算数の授業でも班学習を採り入れた。詳細な「工程表」を作り、単元の総枠を示した。一斉指導の場面を除き、細かな進度は班に任せた。「宿題」はなかったが、子どもたちは家庭学習によって進度を調整するようになった。これに関しては、サボることはほとんどなかった。単元のチェック段階では、班で何点取れば合格という基準を設けた。仮に3人が100点を取っても、1人が0点では合格できない。勝負事が好きな子どもたちは、挑戦心を剥き出しにして頑張った。

2位数で割るわり算ができない子に、子どもがそれを教えるのは容易ではない。そうした子に対しては、『グレーゾーンの子どもたち』などを参考に、個別プログラムを用意した。細部の手立ては必要だが、「班学習」というカタチはこのクラスにはマッチしたようだ。その後、国語の説明文の読みでもこの班を使った。

## ③ K塾プリントでやる気を取り戻す

「できる」という結果は、計算練習が見えやすい。1学期はそれに集中した。



国語力の課題が大きいことは十分承知している。2学期からの主眼はここに移る。「割合・百分率で泣かさない」がスローガンだ。

昨年度・一昨年度の卒業生に兄・姉を持つ子が多く、「K塾プリント」というおっかないものが存在することはよく知っていた。「K塾プリント」というのは、文章題を主にした論理的思考力を磨くプリント群だ。「今年はないの？」と聞かれたら、「きみらにはまだ早い。」と答えていた。

7月に入って、1学期の学習が終わり、パズルの要素のある「K塾プリント」を試してみた。子どものやる気に火を付けたみたいだ。自分たちもそれをやれるようになったという誇りすら感じ取れる。学力差が大きいので与え方が難しいのだが、試行レベルでの食いつきはいい。2学期から本格導入だ。

#### (4) 家庭の教育力を回復する

##### ① 子どもや学級の変化を共有することで学校への信頼を回復する

学年つうしんでは、子どもや学級の変化が感じられる日記を積極的に紹介した。子ども向けに発行しているものだが、保護者の目にも触れるだろう。それをきっかけに、子どもが学校でのことを生き生きと語るようになれば、保護者の心も和らぐに違いない。No.2(4月8日)「出会いはハッピー!!」、No.4(4月15日)「いいぞ、その調子だ!!」、No.6(4月27日)「今年初めての参観日」、No.7(5月8日)「GWかく過ごせり」、No.8(4月13日)「くわしく書くということ」、No.9(5月26日)「5月22日の風景点描」、No.10(6月2日)「遠足でちょっとお兄ちゃんになった」、No.11(6月2日)「雨にも負けず、みんなで遊べばハッピー」、No.12(6月8日)「クラス平均80点突破!!」、No.13(6月22日)「先生たちに授業を見てもらいました」と続き、次に紹介するNo.14(6月22日)「子どもたちの今」に至る。

## おうちの方へ特集号 子どもたちの今

最初の2ヶ月が勝負と決めていた2ヶ月が過ぎました。子どもたちの「今」を報告したいと思います。

### 空気が変わった

金曜日の参観日に来ていただいて、教室の空気が変わったと感じられませんでしたか。子どもたちの顔が明るく、優しい表情になってきたと感じられませんでしたか。今がクラスにとって潮目の時期だと、私はとらえています。

参観でブロック遊びを見ていただいたのには、わけがあります。競争だけれど勝敗にこだわらない姿や、友だちと協力して(もちろん、男女を問わず)一つの物を作り上げる姿を見ていただきたかったのです。そして、

それを「楽しい」と感じている子どもの表情を見ていただきたかったのです。さらには、クラスみんなが一つの課題に向き合っている、学びの姿勢を見ていただきたかったのです。

課題は山ほどあります。しかし、最初の2ヶ月でと考えていた目標は、おおむね達成したと考えています。次は、「ステップ」段階です。

## 学びをつくる

教室の空気の問題は、AAAの2つ目のA、つまり、「あたたかいハートで生きよう」という目標と深く関わっています。

算数で班学習を行うようになって、子どもたちに変化が現れました。学習に主体的に取り組むようになったのです。宿題はキライなのに、班で決めた課題は一生懸命やってくるのです。教え合うことで、教える子と教えられる子双方の学力アップも見られました。ただ、なかなか歯車が噛み合わない班もありました。

「人間コピー」というゲームを3回行いました。子どもには大好評で、毎回、ものすごい盛り上がりようでした。3回目は、算数の学習班でした。教室の後ろに貼ってあったのをご覧になった方もおられるでしょうか。その感想でKRくんは、「みんなで協力してやっていると、班の団結が強くなると思った」と書いていました。私がゲームを通して子どもたちに付けたいと思っていたことと、子どもの受け止めが重なり合ってきました。

18日の木曜日、先生方に国語の授業を見ていただきました。その様子は、No.13の子どもの日記である程度分かっていたかと思います。SaAさんは、「この5分はなんだか速く過ぎていったなと今も思う。この時、国語が楽しいなとひさしぶりに思った。」と書いています。ちょっと難しい課題に真剣に取り組んで、時間が早く過ぎたと感じた。そのことで、国語が楽しいと思ったということです。SiAさんは、指名されたとき答えられなくて残念だったんだけど、友だちの発言に「なるほど」と思い、そんな授業がとても楽しかったということです。KHくんは、「みんなでやったので、けっこうできてよかった」と書いています。竹中くんは、答えがあっていたことがうれしく、楽しかったといいます。ここに出てくる「楽しさ」は、子どもたちが大好きなボール遊びの「楽しさ」とは少し違います。それはまだほんの1コマかもしれませんが、学びに向き合う楽しさです。それも、仲間たちの中で学び取る楽しさです。

全授業時間、私が教室にいる状況は続いています。これからまだまだ紆余曲折があるでしょう。今回は紹介できませんでしたが、多くの子

どもたちが、ものすごい緊張感の中で18日の授業を迎えたようです。敢えてこの時期に研究授業というのは、私も相応の覚悟を決めて臨んだのですが、子どもたちも同じ思いを持っていたのでしょうか。振り返った時、「きっとあそこがターニングポイントだったんだね。」と言える日になると思います。学級集団、学習集団への歩みが、今始まります。

## ② 子どもの生活の立て直しに協力を求める

「協働」というのは、複数の主体が、何らかの目標を共有し、ともに力を合わせて活動するというスタイルを言う。子育て全般においても、学級崩壊からの脱出という課題に限っても、学校と家庭の「協働」は欠かせない。信頼関係に比例して、パイプの太さが決まる。

教室の営みを知らせつつ、繰り返し協力をお願いするしかない。押し付けはしたくないが、「子育て講座」の必要性を感じるような実態もある。『AAA』No.5(4月20日)では、次のように呼びかけた。

おうちの方へ特集号

### キーワードは「7時、朝ご飯、2時間」

山口県のある市で、全ての小中学校が参加して「生活改善・学力向上プロジェクト」の取り組みが展開されました。昨年9月末、その成果が『学力は1年で伸びる!』という著書で公表されました。結論から言えば、全学校の全クラスの学力が1年で伸びています。全学校の全クラスという点に大きな意義があります。

学校での取り組みの特徴は、脳と心を鍛えるモジュール授業にあります。週3回、1時間目の授業を3つのモジュールに分けます。朝1番の「音読」で脳を活性化させます。続く「百マス計算」では集中力とスピードで脳を活性化させます。3つ目の枠は各クラス多様に展開されています。こうして脳のウォーミングアップをしておいて、2時間目以降の授業の効果を高めようというのです。脳を活性化させること(=脳の前頭前野を鍛えること)の有効性は最近の脳科学が実証していますが、その要素が寺子屋の「読み・書き・計算」にあったとは…。昨年の6年生のクラスでも2学期後半から採り入れてみましたが、生き生きと次の授業を迎えることができたと思います。今年の取り組みについては、通信のNo.3をご覧ください。

先のプロジェクトは、生活習慣が学力とどう関係しているかを明らかにし、具体的な生活改善を提案しています。起床時間を例にとれば、何時に起きている子の国語と算数の学力は何点というようにクロス集計を

行い、そこから7時以降に起きる子の学力が明らかに低いという関係性を見つけていきます。

**【提言1】 7時までに起きよう**

起床時間が1日の生活のリズムを決めます。できれば6時半までに起きることが望ましいです。

**【提言2】 毎日必ず朝ご飯を食べよう**

朝ご飯を食べない子どもの知能・学力は極端に低くなっています。授業に集中できず、落ち着きがなくなることが原因です。

**【提言3】 低学年は9時までに、高学年は10時までに寝よう**

10時以降、就寝時間が遅いほど学力が下がっていきます。「寝る子は育つ」と昔から言いますね。

**【提言4】 テレビ・ゲーム・ネットは、高学年では2時間が目安**

短ければ短いほど学力は高くなっています。

**【提言5】 毎日勉強しよう 勉強時間は20分×学年が目安**

毎日、2～3時間勉強している子の学力が最も高くなっています。4時間以上は逆に低くなっています。短時間集中がいいようです。

**【提言6】 いろいろな本をどんどん読もう**

読書量が多くなるほど知能・学力が高くなっています。

6つの提言は、互いにつながりあって1日の生活リズムを作っています。まずお願いしたいことは、「7時までに起床」「朝ご飯」「テレビとゲームは2時間まで」の徹底です。テレビを消すことで、勉強時間と読書時間が生まれます。勉強＝宿題ではありません。予習や復習、宿題プリントの間違い直しなど、自分で課題を見つけて取り組む習慣を付けたいものです。勉強時間の終わりに翌日の準備をすれば、忘れ物もなくなるはずです。子どもの生活を一緒に作ってください。

崩れてしまった生活と学力を立て直すには、家庭と学校の二人三脚が不可欠です。子どもが持っている水色のファイルには、数種類の点検表が綴じられています。遊びと習い事を軸にしたこれまでの生活を、学校での学びを軸にした本来の生活に戻すためのカードです。自分を見つめさせ、気付かせ、めあてを持たせるためのカードです。どうか、時々でいいですから目を通し、子どものやる気を励ましてやってください。学級での取り組みへのご理解と、ご家庭でのご協力を心よりお願いします。

さらに、『AAA』No. 12(6月8日)では、子どもたちの頑張りを知らせるとともに、再び協力を呼びかけた。家庭の事情も分かるのだが、親にもビジョンがなければ徒労感が募る。

# クラス平均80点突破！！

## 2ヶ月の成果

5年生のスタートから2ヶ月で、最初の目標をクリアした。次の表を見てほしい。これは、3年生と4年生の計算問題から、かけ算5問とわり算7問を取り出して100点満点に直したものだ。

	かけ算		わり算		合計	
	平均点	合格者	平均点	合格者	平均点	合格者
4月7日	66.7点	11人	63.5点	7人	64.8点	9人
6月5日	83.3点	14人	78.6点	13人	80.6点	12人

4月7日の平均点は、約65点だった。それが6月5日の再テストでは、約81点になった。わずか2ヶ月で16点も上がったことになる。これはびっくりするほどすごいことだ。

5年生がスタートしたところと今と、どこがどう変わったのだろう。一人ひとりの変化、成長をふり返ってほしい。中には、点数が60点、50点アップした人もいる。この人たちは、授業への集中度がちがってきている。しかし、80点の合格ラインに達していない人も6人いる。クラスの3分の1だ。その人たちも4月と比べると20点近くアップしたが、合格ラインまではさらに20点以上が必要だ。次の目標は、2学期に勉強する小数のかけ算・わり算までにわり算の平均点を80点以上にする、合格者を80%(15人)以上にあることだ。

再々テストは、「100日計算」終了後の9月はじめを予定している。継続は力なり、がんばろう。

## おうちの方へ テレビを消しましょう

先日、全学年で生活調べのアンケートをしました。結果は後日お知らせすることになると思いますが、5年生の調査用紙を見ていて気がかりなことがありました。

平日(月～金曜日)、テレビやゲームに費やしている時間が4時間以上の子供が、10人を超えています。この数の多さには目を疑うばかりです。就寝時刻は10時前後に集中していますので、夕方以降、テレビ漬け状態になっていることになります。これで果たして高学年の家庭学習が可能でしょうか。学習の用意も含めて、明日も頑張ろうという心の準備はできるのでしょうか。

通信のNo.5で、「7時までに起床」「朝ご飯」「テレビとゲームは2時間まで」の徹底をお願いしました。繰り返しになりますが、子どもの学力



アップはテレビを消すことから始まります。子どもの頑張りを後押しするためにも、是非ともご協力ください。

かけ算・わり算のチェックテストの結果と子どもの生活に、通信No.5で紹介したのと同様の相関関係が浮かんできました。

まず、起床時刻が7時以降の子がいました。7時以降に起きる子の学力が明らかに低いという関係性が、歴然とあらわれました。また、望ましいとされる「6時半までに」起床の子は、合格ラインに達しない子にはほとんどいませんでした。さらに、朝食を食べない子の点数が極端に低くなるという傾向が、今回の結果に顕著にあらわれていました。つまり、朝の生活リズムをしっかりと確立させることが、子どもの学力には絶対に必要なのです。

これも先の繰り返しになりますが、崩れてしまった生活と学力を立て直すには、家庭と学校の二人三脚が不可欠です。学校での子どもたちは、まだまだ十分なレベルではありませんが、少しずつ生活の落ち着きと学力を取り戻しつつあります。集合体としてのクラスの機能も回復しつつあります。タイミングを逃せば、停滞が始まります。今こそ、子どもの生活を立て直してください。ご協力を心よりお願いします。

#### **(5) 信頼と協力を基盤にした学級文化の創造**

学級の空気・雰囲気や価値観を可視化した結晶を「学級文化」と呼んでいる。学級文化は仲間を繋ぐ「ボンド」であり、その創造過程そのものが学級文化だとも言える。子どもたちのマグマ溜まりには、溢れるほどのエネルギーが満ちている。信頼と協力を基盤に、子どもたちの自立を支援するという方向性を持ち、何を引き出し束ね形作っていくか。思案は尽きない。

### **6 学級崩壊を超える3 ～学級文化の創造～**

この項は機会を改めて書きます。

※この項は年度末に書く予定だった。しかし、現実には余白のままだ。「立て直し」に秋までかかってしまったため、次のステージを描くに十分な時間を確保できなかったのだ。6年生の1年を後輩に託し、私は異動した。



## ■学力をつけるとはどういうことか■

# エラくなるとはどういうことか

2012.3.29

## 1 はじめに

「学力」論争はひとまず置こう。社会を覆う空気は、目に見える学力、つまりテスト等で数値化される学力論に傾倒している。それが学力の全てではないことは勿論だが、敢えてテスト学力に真っ向から挑みたい。

児童数10名の小規模学級を、5年・6年と担任した。6年時の学級通年平均点は、国語が92点、算数が90点を記録した。4年生の頃、両教科ともに最下位評定者が3人いた。そのことを思うと、2年間のクラスの成長は実に大きい。この子どもたちの成長の跡を辿りながら、「エラくなるとはどういうことか」という命題に迫ってみたい。

## 2 ケースA

### (1)素描Personality Sketch

#### ①学習状況(5年当初)

4年生の評定は、国語・算数ともに低い。特に漢字に対する「アレルギー」があり、読みも覚束ない。勘が良く、読みが下らないにもかかわらず、読解テストは好成績をとれる。

#### ②Q-U結果(5年生4月9日)

Q-Uとは

河村茂雄氏(早稲田大学)が開発した楽しい学校生活を送るためのアンケート。Q-UはQUESTIONNAIRE-UTILITIESを略したもの。「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」(学校生活意欲尺度)と「いごちのよいクラスにするためのアンケート」(学級満足度尺度)で構成されている。さらに、学校生活意欲は、友達関係・学習意欲・学級の雰囲気の下位領域からなる。学級満足度は、承認得点と被侵害得点をクロス集計し、学級生活満足群・非承認群・侵害行為認知群・学級生活不満足群分類される。

学校生活意欲が高く、また学級満足度尺度は「学校生活満足群」に属している。ただ、「あなたが自分の思ったことや考えたことを発表したとき、クラスの人たちは冷やかしたりしないで、しっかり聞いてくれると思いますか」という問いに、唯一「まったく思わない」と答えている。この設問を含め、A児の中では承認得点が低く、確かな学力に裏打ちされた自己肯定感を高めていくことが課題である。

## (2) 転機Turning Point

A児の転機は、5年生2学期末の漢字50問テストで70点をとった時であったと捉えている。これを「大転機」だとすれば、それにつながる「小転機」は、毎週の漢字小テストにあったと考えられる。

年度はじめ、漢字学習のパターン化を図った。月曜日は漢字ドリル右ページの新出漢字を読んでなぞり書きを3回、火曜日は左ページの漢字に読み仮名をつけてなぞり書き1回、水曜日は左ページの写し書き2回、木曜日は右ページの用法・熟語を漢字ノートに視写、金～日曜日は左ページの漢字をノートに適宜練習し翌週月曜日に小テストを行う。頑張りが即点数に表れるこの学習パターンは、A児のやる気を刺激した。振り返って思うに、週末の「適宜」練習が成功のカギだった。練習の質や量とテスト結果の関係から、A児は努力することの意味を感じ取った。10月実施のQ-Uで、「しっかり聞いてくれると思いますか」は4段階評価の1から4に好転した。ちょっとした自信が、クラスでの居心地を押し上げた。それが、2学期末の漢字50問テスト70点につながっている(ちなみに、1学期末は46点)。

70点はクラスの下位であることに違いはなかったが、本人の喜び様は今も忘れられない。さらに、それを見た母親がベタ褒めしてくれた。母親の言葉がA児の自己肯定感・自己効力感をどれほど高めたか計り知れない。漢字50問テストのその後は、86点、84点、96点、94点となっている。国語科全体の成績も毎学期上昇を重ね、6年時の通年平均点は89点を記録した。

## (3) 教訓Teaching Point

A児のケースは、「やる気」につながるいくつかの示唆を与えてくれている。まず、目標が具体的で手が届く位置にあること(スモールステップ化)。そして、目標達成のためのプロセス(学習過程)を明確に示してやること。その際、自由裁量の余地を残しておくことが、その後の「自立」を助けるようである。最後に、成功体験を重ねさせること。

高学年になると、褒めることは実に難しい。本人が達成感を持ったタイミングでの褒め言葉でないと、決して心に響かない。70点のタイミングでの母親の言葉がいい例だ。

明るく元気に振る舞っている子でも、点数への引っ掛かりは潜在的にある。確かな学力に裏打ちされた自己肯定感は、どの子にとってもエラくなるための必要条件だ。

## 3 ケースB

### (1) 素描Personality Sketch

### ①学習状況(5年当初)

4年生の評定は、国語・算数ともに低い。漢字や計算の練習は熱心にやるが、なかなか定着しない。

### ②Q-U結果(5年生4月9日)

学校生活意欲は標準的な数値を示しているが、クラスにおける相対的位置としては低い。「あなたは、クラスの人から好かれている、仲間だと思われていると思いますか」「あなたのクラスは、勉強やいろいろな活動に、まとまって取り組んでいると思いますか」という設問には、否定的な回答をしている。

学級満足度尺度は「侵害行為認知群」に属している。「あなたは運動や勉強、係活動や委員会活動、趣味などでクラスの人から認められる(すごいと思われる)ことがありますか」という設問には、4段階評価の1を選んでいる。また、「あなたは休み時間などに、ひとりぼっちでいることがありますか」には、「少しそう思う」(4段階評価の3)と答えている。

ここからは、自己肯定感が低く、学級の中に確かな居場所を持てていないB児の姿が浮かんでくる。

### (2)転機Turning Point

学校生活意欲に関する2つの設問については10月のQ-Uで好転したが、総合値は変わらなかった。学校生活意欲尺度が上位に移動したのは、6年生5月のQ-Uにおいてだった。学級満足度尺度は10月のQ-Uで「学校生活満足群」に移動したが、「すごいと思われているか」の評価が好転するのは1年後であった。――B児の変容には3つのポイントがある。①クラスに居場所ができた5年生10月期、②学校生活意欲尺度が上がった6年生5月期、③自分に自信を持てるようになった6年生10月期がそれである。①についてはD児のところで述べる。

B児は、漢字学習のパターンを体得し体感するのに最も時間を要した。それでも学期末の50問テストは飛躍的に上がり、3学期には84点をとった。このころからB児からおどおど感が消えていく。②の変化は、友達関係と学習意欲のポイントが上がったことによる。友達関係の好転が学習意欲を高め好成績につながったのか、好成績の結果おどおど感がなくなり友だちと対等の関係を持てるようになったのか、両者の関係は微妙である。

その後、漢字50問テストの成績は94点、100点と上昇した。6年時の国語科通年成績も、読解力・言語力・漢字力ともに10数点上がった。これが③の変容と関係している。表情は生き生きとしており、よく話すようにもなった。しかるに、算数はと言うと計算力こそ上がったが、ネックであった思考力はほとんど変化なく、全体としては飛躍的上昇とはならなかった。

### (3)教訓Teaching Point

「読み・書き・計算」と言うが、今も昔も変わらぬ「真理」を言い当てているようである。

## 4 ケースC

### (1)素描Personality Sketch

#### ①学習状況(5年当初)

4年生の評定は、国語・算数ともに中位。宿題忘れが時々ある。

#### ②Q-U結果(5年生4月9日)

学校生活意欲は標準的な数値を示しているが、クラスにおける相対的位置としては低い。「仲間だと思われているか」と「授業中に、先生の質問に答えたり、自分の考えや意見を言うのは好きですか」に対して、「あまりそう思わない」と答えている。

学級満足度尺度は「学校生活不満足群」に属している。被侵害得点は2番目に高く(これは低い方がよい)、承認得点は最も低い(これは高い方がよい)。「すごいなと思われているか」「しっかり聞いてくれると思うか」「あなたのクラスには、いろいろな活動に取り組もうとする人が、たくさんいると思いますか」という設問に対して、2(あまりそう思わない)を選択している。被侵害項目では、「ひとりぼっちでいることがあるか」「あなたはクラスでグループを作るときなどに、すぐにグループに入れないで、最後の方まで残ってしまうことがありますか」について3(少しある)と答えている。

### (2)転機Turning Point

C児の変容は、10月Q-Uの承認に関する設問の好転から始まった。そして、6年生5月Q-Uでは被侵害に関する設問が好転した。10月Q-Uになると学校生活意欲尺度が上位に移動し、学級満足度尺度も「学校生活満足群」に属した。ここに至って、「自分の考えや意見を言うのは好きか」の回答が好転した。承認得点が上がった背景をスケッチしてみよう。

私の現在のクラス経営では、宿題は毎日ある。登校するとすぐに提出させ、点検をして朝の会には返却するというのが通常のパターンである。忘れ物調べはしないし、居残り学習もない。ちきんとやることでいい結果が得られたという教室の空気を、ひたすら醸成する。もともと真面目な子どもたちだから、軌道に乗るまでそれほど時間は掛からなかった。やがて、C児もその流れに乗ってくる。

目標のスモールステップ化ということを先に書いたが、実際求めているところは相当高い。そのためのプログラムも多様だ。音読は、発音・発声練習から始めた。聞き取りやすい話し方は、自分を認めてもらうための必須アイテムだ。そして、毎日のスピーチのために、スピーチの「型」を教えた。国語力をつけるため

に読解力のスキルを指導し、読解プリントや文法プリントを宿題に課した。算数では4マス関係図を導入し、文章問題に特化した「K塾プリント」を毎日課した。5年生の後半からは、算数パズルを用意して思考力を磨くことをめざした。――結果として、こうしたことの一つひとつが、C児の中で眠っていたものを目覚めさせたという捉え方をしている。

スピーチについては相互評価のためのカードを用意している。魅力的なスピーチをすることが多かったC児には、当然ながら高評価のカードが集まった。数値化された評価と言葉のメッセージが、自信を生み自己肯定感を高めていった大きな要素だと考えられる。

自信は、生き方をも変える。5年当初、最も存在感の薄かったC児は、6年になると委員会の長を務めるようになった。さらにいくつかの責任ある立場を経て、ついには、学校生活意欲が向上し「自分の考えや意見を言うのは好き」と言うに至る。人間関係の問題を省いて書いているので、現実はもっと複雑で複合的なのだが、明るく生き生きとした表情になった。6年生の成績は国語が96点、算数が98点で、申し分のないレベルに達した。

### (3) 教訓Teaching Point

中の上に位置する子どもの場合、何かしらの障壁が取り除かれると上位に移動する可能性が高い。それは、下位から中の下に位置する子どもに対する学習理解支援の課題とは明らかに違う。C児の場合、括って言うと自己肯定感を高めることと居場所を確保することであった。どちらが先かは断言できないが、このケースでは自信が意欲や居場所につながっていった。いずれにしても、背中を押す「何か」を見極め設定することが大事なのだが、それが実に難しい。

## 5 ケースD

### (1) 素描Personality Sketch

#### ① 学習状況(5年当初)

4年生の評定は、国語・算数ともに高い。

#### ② Q-U結果(5年生4月9日)

学校生活意欲は高いが、学級満足度尺度は「侵害行為認知群」に属している。学級満足度の内、承認得点は2番目に高いのだが、被侵害得点がクラスで最も高くなっている。特に、「あなたはクラスの人にいやなことを言われたり、からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか」「あなたはクラスの人にばかにされるなどして、クラスにいたくないと思うことがありますか」「あなたはクラスの人たちから、ムシされているようなことがありますか」の3項目について、3(少しある)と答えている。日常観察からはこうした状況は確認されないの

だが、感性の鋭いD児がそう感じているということが問題だ。

## (2) 転機Turning Point

被侵害感は、10月のQ-Uで「クラスにいたくないと思う」「ムシされる」ことがなくなり好転し、「学校生活満足群」に移動した。残る「つらい思い」は、6年生5月のQ-Uで解消している。

私は、D児が実際にいじめを受けていたとは考えていない。にも関わらずD児を覆う疎外感、真に仲間になれていない集団の空気を映す鏡だったように思う。

さて、D児の疎外感を払拭したものは…。複合的要素があるだろうが、総合的な学習の時間の取り組みがその最たる要因だろう。「地域遺産はやま」をテーマにした調査・まとめ・DVD収録・映画制作の6ヶ月間、子どもたちは共通の目的を持った仲間になった。具体的な目標に向かって一緒に活動し、その成果が目に見える形になったとき、集団は変わる。

## (3) 教訓Teaching Point

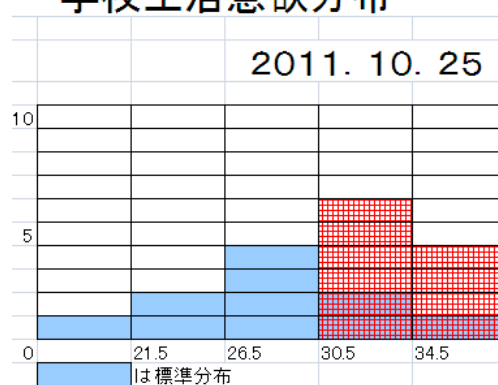
D児は、卒業前に「6年になって成績が上がった」と繰り返し書いた。実際には、国語が95点から97点に、算数が97点から99点に上がったに過ぎない。もともと、成績は良かったのだ。では、D児の「実感」は何なのか。それは、教室の中に自分の居場所があるという安心感以外の何物でもない。安心感が心を解き放ち、それが自分を正当に評価させたのだろう。D児のケースは、エラくなるというのは点数の高低だけの問題ではないことを示している。

## 6 おわりに

### 学級満足度尺度結果のまとめ

2011. 10. 25									
侵害行為 認知群				学校生活 満足群					
0人	0%	全国	18%	10人	100%	全国	38%		
				承認得点					
				24					
侵害行為認知群								①	
								④	
								①	
								②	
				20					
◆									
22				15				10	
被侵害得点				10				6	
学校生活不満足群				15					
				10					
要支援群				8				被承認群	
学校生活不満足群									
0人	0%	全国	26%	0人	0%	全国	18%		

### 学校生活意欲分布



学力を、「意欲」と「居心地」と関係づけながら論じてきた。それは定説を改めてなぞったに過ぎないが、私にとっては意味のある証明であった。Q-Uという集団を客観的に見る手法に出会って日が浅いことに加えて、全員の学力が伸びこれほど高得点に達した



学級を担任したことがない。全員の学力が伸びたと言っても、一人ひとりの状況はまさに十人十色である。今回は4人をピックアップしてみたが、そこから得た教訓がある。それは、どの子にとっても教室は「ジム」であると同時に「ホーム」でもなければならないということだ。一般には、子どもを鍛える場である学校＝ジムと子どもを包み込んでくれる家庭＝ホームという図式で、子育ての連携が語られる。それはそうなのだが、今の教室にはその両面が必要なことを4つの事例は語っている。ジムとホームの兼ね合いは個々の状況によって違う。ぴったりの処方箋を作るのは、担任の仕事だ。「エラくなる＝テスト成績が上がる」という極めて一面的な学力観でスタートした文章は、エラくなるとは安心できる教室で精一杯自己実現することだという結論で終わりとする。